

# 訓点資料の訓読文について

柴田 雅生\*

## 一 本稿の目的

訓点資料が日本語史研究の重要な資料の一つであることは周知の通りである。殊に、書写の年時や筆者加号者が明確である資料が多いこと、書写加号の当時の原本が多く存することは、他の追隨を許さない優れた特性といえる。近年は、日本だけでなく、中国大陸・韓国における訓点資料の発見・紹介も積極的になされるようになり、その指し示す範囲も広がりつつある。

一方で、一九九三年には訓点語学会が設立四十周年を迎え、それを記念して研究講演会が催された。そこでは、これまでの「訓点語学」の歩みを振り返りつつ、新たな展望へ向けての提言が築島裕博士・石塚晴通氏によって示された。<sup>注</sup> 両氏による講演内容は、題目こそ「足跡」と「展望」に分かれてはいるものの、共通してより精緻な方法論とそ

の実践を求め、新たな段階を目指そうというものであった。

本稿で取り扱う問題も、訓点資料の取り扱いの再検討に関することからである。とりわけ、訓点をどのように読み解くのかについて改めて考えてみたいと思う。解読方法については、既に築島博士が、<sup>注</sup> ヲコト点と仮名とが相俟って訓下される場合、帰納・復元作業は厳正でなければならず、訓点のない漢字や部分の補読には漢文訓読の総合的知見が必要であって、これに熟未熟の差があると同一資料でも解読者ごとに異なった訓下し文が生じ、国語資料として利用度を減ずることがある。『国語学大辞典』「訓点資料」の項）とされ、早くから問題点を整理されている。また、前掲の講演<sup>注</sup>においては、

次に、訓点資料研究に當つて、批判的態度が望まれることである。例へば、同一の訓点資料の解読について、その追試が行はれることが望ましい。文献の性質上、ケアレス・ミスは避けられないが、解読者の主観による誤読等を修正して、より正確な解読文が作成されることが強く期待される。

と述べられ、既発表の解読文についても批判・検証が必要であることを説かれた。訓点資料の短所として、閲覧調査の困難さ、訓点の認定・解読の困難さ等もあるが、それゆえできるだけ解読者の主観の介入を排除した、客観的正確性をもった資料研究とその公開が求められているのである。

では、そのような研究に何が必要であるのか。具体的にはどのような方法をとればよいのであろうか。

いわゆる訓点資料について『国語学大辞典』では次のように定義されている。

漢文が書かれた古写本・古板本に、その漢文の訓読を示すために、仮名やヲコト点や返点その他の符号などの訓点を、その紙面に直接に施した文献。これを国語研究の資料として見立てた場合の慣用化された呼称。

訓点資料に関してはその特殊性に言及されることも多いが、漢文の訓読を仮名やヲコト点等で示すという表記上の特徴が第一であって、最終的には、いわゆる和文資料や外国資料などと同様に、日本語の資料の一つとして扱われるべきものと考えられる。もちろん、訓読される対象は漢文（日本国内で作られた漢文も含め）であり、それらを訓んだ人物の階層や状況なども考慮に入れなければ、等しく扱うことはできない。しかし、資料間の差異は、資料研究の進展とともに修正されるべきものであって、最初から固定化されているものではない。したがって、訓点資料に関しても、他資料と同様に、表記上の整理を詳細にするべき必要があると考える。その上での資料性の再検討が必要なのである。

訓点資料の表記に関する先行研究は、これまでヲコト点図や仮名字体を中心として行われてきたが、体系的な視点からの研究がないわけではない。築島博士の名著『興福寺本大慈恩寺三蔵法師伝古点の国語学的研究 研究篇』の第二章第一節「傍訓注記についての一傾向」においては、完全付訓の有無を当時の加点が学問的な実質を伴っていることの証しとされ、訓点語の歴史的・位相的位置を示す指標として考えられることを示された。また、峰岸明博士は高山寺蔵『史記』における漢字への付訓が、漢字と訓との対応関係、特に「定訓」の存在を前提として整理しうることを述べられた。いずれも総合的な調査に基づくものであり、近年の越智裕三氏による返点等の再検討なども同じ

方向を意図したものと考えられる。今後さらに多くの資料について求められるこれらの方法に関して、本稿では既発表の訓読文を比較検討することにより、解読の方法論上の問題点に整理を加えようと思うものである。

## 二 資料

本稿では、資料として、知恩院蔵大唐三蔵玄奘法師表啓平安初期点<sup>漢</sup>を主とし、妙法蓮華經方便品平安初期点（箕面学園現蔵、旧山田嘉造氏蔵）を併せ用いることとする。それぞれの訓読文は以下の通りである。

知恩院蔵大唐三蔵玄奘法師表啓平安初期点（以下、本稿では「表啓」と称する）

○吉沢義則「大唐三蔵玄奘法師表啓の訓点」『国語国文の研究』所収、一九二七年四月）

○築島裕「知恩院蔵大唐三蔵玄奘法師表啓 附漢字索引・語彙索引」『訓点語と訓点資料』第四輯、一九五五年五月）

○遠藤嘉基「知恩院蔵大唐三蔵玄奘法師表啓古点について」『国語国文』二四―一一、一九五五年一月）

○山田忠雄「知恩院蔵本大唐三蔵玄奘法師表啓古点の研究」『国語学』第二九輯、一九五七年六月）

○中田祝夫「知恩院蔵本大唐三蔵玄奘法師表啓古点 影印・釈文」『東大寺諷誦文稿の国語学的研究』所収、一九六九年六月、風間書房刊）

妙法蓮華經方便品平安初期点（以下、本稿では「法華経」と称する）  
 ○築島裕・小林芳規「故山田嘉造氏蔵妙法蓮華經方便品古点釈文」  
 『訓点語と訓点資料』第七輯、一九五六年八月）

○大坪併治「山田本妙法蓮華經方便品第二試読」『訓点語と訓点資料』第七輯、一九五六年八月）

○中田祝夫「重要文化財法華經方便品解題」（複製本解題、一九八一年三月）

この二資料を用いるのは、複数の研究者による解読結果が公表されているからである。複数の訓読文が発表されているものには、このほかに漢書楊雄伝天曆二年点、法華義疏長保四年点、法華文句古点、神田本白氏文集天永四年点などがあるが、三種類以上のものは本稿で扱う二資料と漢書楊雄伝天曆二年点<sup>注六</sup>だけである。

二資料についての解説はそれぞれの研究に従うが、各研究で言及されている解読の困難さは、このような複数の解読文を見るだけでも確認できる。ともに平安初期の仏書の訓点資料ではあることに起因することがあるであろうが、具体的にはどのような箇所<sup>注九</sup>にどのような解読上の問題が生ずるのであるか。それを整理しておくことも、この二資料にとどまらない訓点資料全般の解読に当たっての下準備として必要なことと思われるのである。

「表啓」に関しては、山田忠雄氏が前掲の論文において、先行研究を受けて綿密な調査を行われた。特に認識論的<sup>注九</sup>文字論の立場から有益な多くの見解を示され、文字認定（判読不能も含め）に関してはほぼ完成されたものといつてよいと思われる。本稿のような方法が可能であるのも、山田氏の調査があつてこそである。また、「法華経」につ

いては中田氏が釈文においてこの資料に加えられた多くの訓点の姿を忠実に再現され、多くの知見を得ることができた。このほかにも、諸氏の解説や補注にはさまざまな学恩を蒙っている。稿者には、それらと比較対照させることは出来ても、優劣をつけることなど到底不可能である。本稿の趣旨はあくまで訓読文の比較結果から解読の問題点を探ることにある。以下の検討においては個々の訓読文名を示すことはせず、アルファベットをもって区別するにとどめることとした。<sup>注一〇</sup>

### 三 訓読文の差異を生む要因

まず具体的な例をもとに、どのような要因が考えられるのかを整理しておきたいと思う。次に掲げるのは、表啓の第三表の題目に相当する部分である。

○請<sup>レ</sup>大<sup>ニ</sup>宗<sup>ノ</sup>文<sup>ノ</sup>皇<sup>ノ</sup>帝<sup>ノ</sup>作<sup>レ</sup>經<sup>ノ</sup>序<sup>ノ</sup>并<sup>ニ</sup>題<sup>ノ</sup>經<sup>ノ</sup>表<sup>（表啓54行）</sup>

a 大<sup>ニ</sup>宗<sup>ノ</sup>文<sup>ノ</sup>皇<sup>ノ</sup>帝<sup>ノ</sup>に<sup>レ</sup>經<sup>ノ</sup>序<sup>ノ</sup>并<sup>ニ</sup>題<sup>ノ</sup>經<sup>ノ</sup>（を）作<sup>（り）</sup>た<sup>ま</sup>へ<sup>ト</sup>請<sup>（ひ）</sup>た<sup>（て）</sup>ま<sup>（つ）</sup>ツ<sup>（り）</sup>シ<sup>（や）</sup>表<sup>（へ）</sup>

b 【請】大<sup>ニ</sup>宗<sup>ノ</sup>文<sup>ノ</sup>皇<sup>ノ</sup>帝<sup>ノ</sup>に<sup>レ</sup>經<sup>ノ</sup>の<sup>の</sup>序<sup>の</sup>并<sup>に</sup>題<sup>の</sup>經<sup>（を）</sup>作<sup>（り）</sup>た<sup>ま</sup>へ<sup>ト</sup>請

c 請<sup>（ひ）</sup>た<sup>（て）</sup>ま<sup>（つ）</sup>ツ<sup>（り）</sup>シ<sup>（や）</sup>表<sup>（へ）</sup>  
 大<sup>ニ</sup>宗<sup>ノ</sup>文<sup>ノ</sup>皇<sup>ノ</sup>帝<sup>ノ</sup>に<sup>レ</sup>經<sup>ノ</sup>の<sup>の</sup>序<sup>の</sup>并<sup>に</sup>題<sup>の</sup>經<sup>（を）</sup>作<sup>（り）</sup>た<sup>ま</sup>へ<sup>ト</sup>請

d 請<sup>（ひ）</sup>た<sup>（て）</sup>ま<sup>（つ）</sup>ツ<sup>（り）</sup>シ<sup>（や）</sup>表<sup>（へ）</sup>  
 大<sup>ニ</sup>宗<sup>ノ</sup>文<sup>ノ</sup>皇<sup>ノ</sup>帝<sup>ノ</sup>に<sup>レ</sup>經<sup>ノ</sup>の<sup>の</sup>序<sup>の</sup>并<sup>に</sup>題<sup>の</sup>經<sup>（を）</sup>作<sup>（り）</sup>た<sup>ま</sup>へ<sup>ト</sup>請

e 請<sup>（ひ）</sup>た<sup>（て）</sup>ま<sup>（つ）</sup>ツ<sup>（り）</sup>シ<sup>（や）</sup>表<sup>（へ）</sup>  
 大<sup>ニ</sup>宗<sup>ノ</sup>文<sup>ノ</sup>皇<sup>ノ</sup>帝<sup>ノ</sup>に<sup>レ</sup>經<sup>ノ</sup>の<sup>の</sup>序<sup>の</sup>并<sup>に</sup>題<sup>の</sup>經<sup>（を）</sup>作<sup>（り）</sup>た<sup>ま</sup>へ<sup>ト</sup>請

それぞれの訓読文での表記方法が異なるので、一概に比較できるものではないが、明示されている部分を見るだけでもいくつかの違いを見出すことができる。簡単に整理して示すと次のようになる。

ア「請」——（こひ）た（てま）つ（り）し・た（てま）つ（り）

し  
 イ「作」——（つくりたまへ）ト・（なしたまへ）ト・（なす？つくる？コ）トヲ

ウ「經序」——經序・經の序・經の序（と）

エ「題經」——題經（を）・經（に）題（せむことを）

ア・イは漢字の訓読に関わるものであるが、アは訓点によって示された部分をいわゆる補助動詞部分と解するか、本動詞部分と解するかによる違いと思われる。訓点の「た」を認めるか否かも異なる。イは「作」字のよみが中心ではあるが、「ヲ」を認めるか否かと関連して「ト」をどのような要素として認めるかが異なる。ウは「の」の点を認めるか否か、後続の「并」字との関わりを重視して「と」を補読するかである。エは訓読するか、音読するかの違いと考えられる。これらを整理すると、少なくとも（一）訓点の認定に関するもの、（二）訓点の適用に関するもの、（三）補読に関するもの、の三種類のことがらを挙げることができよう。このほかにも、文の区切り等や語句のかかり受けの違いも考慮する必要があるかと思われるが、ひとまず以上の三点に関して、以下、具体例を示しながら検討を加えていきたいと思う。

（一）訓点の認定に関するもの

訓点の認定に関しては、加点の用具やその具体的状況、及び保存状況等によって難易さまざまである。「表啓」に関しては、山田氏が次のように指摘する。

もともと 点の うちがひや 誤読が すくなからず ある ほか、永年に わたる 朱点の 剥落が 昭和二十二年四月の 国

宝修理以来 とみに 進行したかに みうけられる 事情も てつだって 現在 きはめて 難読である。

「法華経」は、

全巻にかなり詳細な白墨の訓点があり、平安初期の加点と思はれるが、その訓点は数次に亘るものと見え、初めに一旦加へたものを後に洗ひ流したかと思える所も多くあるため、読解は相当に困難であり、（以下略）（築島・小林両博士による解説）

白点には新古二種がある。古点は、元来簡単な上に、剥落甚しく、かつ新点に隠れて僅かしか見えない。（大坪博士による解説）

であり、朱点と白点の違いこそあれ、ともに剥落の程度がはなはだしく、読解が困難な資料ではある。諸氏の見解の違いもまずはそこに起因する部分が大いであろうことは十分予想される。

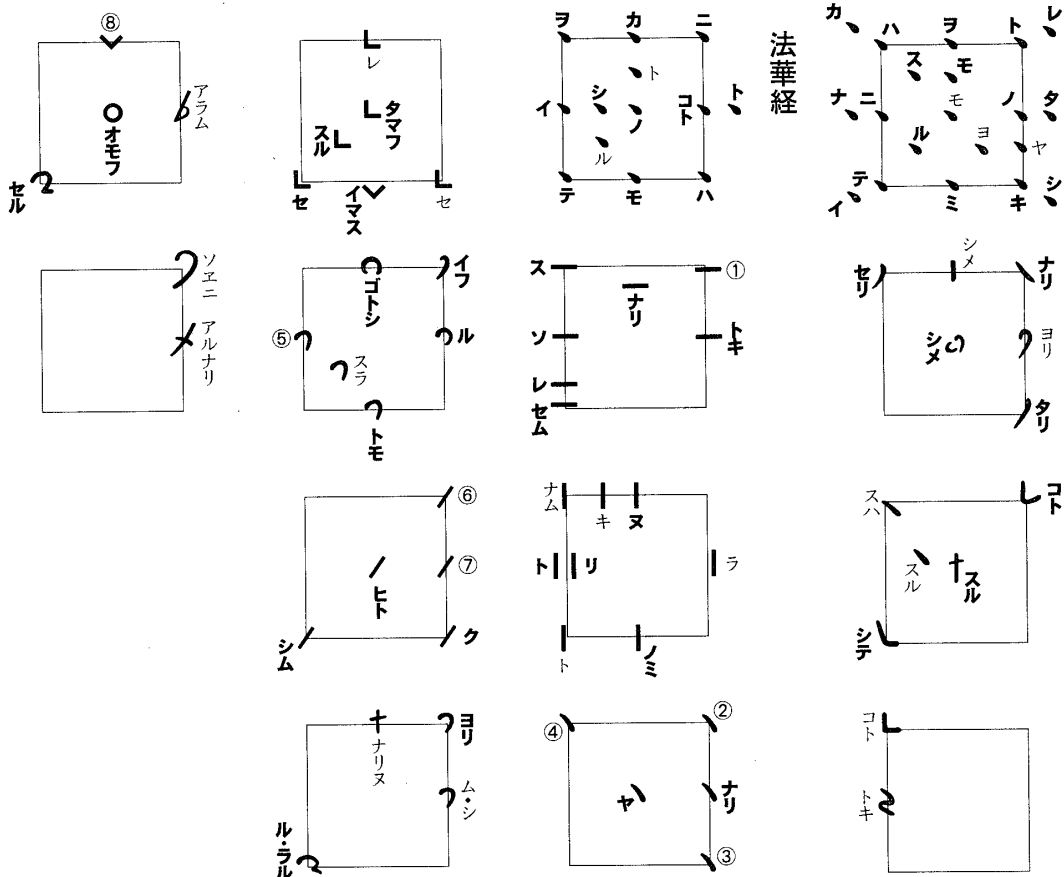
訓点の認定は、第一にヨコト点図や仮名字体表の違いとして現れる。はなはだ簡略な方法であるが、ヨコト点図について二資料のヨコト点図をまとめてみると、次のようになる（次頁図）。

太字の仮名で示したのが「表啓」においては四氏以上の認める点、「法華経」においては三氏ともに認める点である。「表啓」について五氏としなかったのは、最初に資料を紹介された吉沢博士が認定した点の数が、他に比べ少ないためである。「表啓」において、「も」の点が中央付近とやや上寄りの二箇所<sup>注二</sup>に存するのは、その位置に動揺が見られるためであり、実質的にはさほどの差はないものと思われる。認定されることが少ない点は用例数が少ないものであり、それだけに認定にも困難が生じたものである。それらを除けば、ヨコト点の位置と言語との対応の認定に関してはさほど違いはないということになる。

一方、「法華経」においては、諸氏の認められたヨコト点にはかな

表啓

法華經



- ①モチテ・ヲモチテ ②ナリ・キ・フ ③ナラバ・トナラバ ④ヒ・タテマツル ⑤ム・ノタマフ・トノタマフ ⑥キ・アリ ⑦アリ・タリ ⑧マウス・トマウス

りの出入りが見られる。「、」で示される基本的なヨコト点にはさほどの差はないが、それ以外では、丸付き数字で示した同一のヨコト点に三氏が異なる仮名を対応させている例を筆頭に、その認定には解釈上の大きな問題があると言わねばならない。この違いは、類似するヨコト点が『成実論』天長点や飯室切『金光明最勝王經註釈』古点に見られることをどう位置付けるかによるものと思われる。

仮名に関しては、諸氏それぞれに仮名字体表を示されているものの、「表啓」における山田氏の調査によれば、仮名字体には異体が少なからず存し、その解釈は容易ではないが、全体から見れば単体で問題となる仮名はさほど多いわけではない。「法華經」においてはヨコト点との関係で認定に差異が見られるけれども、こちらも単体で問題となる仮名は多くはない。むしろ、個々の具体例の認定においてさまざまの差異が生じ、訓読文上の違いに反映するのはヨコト点の方なのである。ヨコト点の認定するか否かの違いが見られる例には次のようなものがある。

「表啓」

- 37行 響 ①ヒ、かす〔ad〕 ②ヒ、(か)す〔bce〕
- 42行 身 ①身を〔ade〕 ②身(を)〔bc〕
- 42行 邁 ①すコシテ〔acde〕 ②(す)コシテ〔b〕
- 47行 所 ①(と)こ(口)をは〔ade〕 ②(と)こ(口)は〔bc〕
- 65行 省 ①(み)て〔bde〕 ②みて〔a〕 ③(か)へり(み)

て〔c〕

75行 翻訳 ①翻訳するを〔d〕 ②翻訳するは〔a b〕 ③翻訳する(こと)は〔c〕 ④翻訳する(に)〔e〕

〔法華経〕

87行 教―化 ①教化(し) タマへるヲモチテ〔a〕 ②教化(し) たまひ(し) をもちてナリ〔b〕 ③教化(し) たまひタルをもちて〔c〕

173行 度 ①度シタマヒ〔a〕 ②度(し) たまひしと(き) に〔b c〕

5行 行 ①行じたまふことを〔a c〕 ②行じたまふこと〔b〕  
 65行「省」字①は「(かへりみ)て」とすることも可能であろう。これに対して、②③は訓の違いにつながるものではあるが、加点されたものについては同じ認定である。「表啓」においては、このように基本的に同じ訓としながらも、ヨコト点の認定を異にするものがあるが、それは(二)で触れることとしてここには示さなかった。75行「翻訳」については山田氏による詳細な注があり、諸氏が共通して触れておられるように、資料としての解読の難しさがうかがえる。

仮名の認定に関するものは「表啓」に目立ち、

36行 秀 ①いス(くれ)て〔a〕 ②ホいて〔c〕 ③(ひい)て、〔e〕

14行 引 ①(ひき)ケム〔a〕 ②ヒ(き)ケム〔d〕 ③ヒケ(り)〔b c e〕 ④(ひか)ム〔c〕

79行 息 ①(そ)クヲを〔d〕 ②(そ)クを〔b e〕 ③クチを〔a〕 ④(は)ク(い)キを〔c〕

などが挙げられ、63行「秀」字に関しては山田氏が「てりて」という別案も提示されている。ヨコト点との違いは、仮名の字母としてどのような漢字を想定し、それをどのように省画または草体化したものと捉えるかにあり、考慮すべき条件が多い対象ではある。しかし、それも全訓が付されていたり、頻度の高い字訓が適用できる場合にはさほど問題とならないように思われる。むしろ、解読の困難が生じるのは、訓の一部しか加点されていないと考えられる場合や仮名とヨコト点相俟って加点されている場合であると思われる。

(二) 訓点の適用に関するもの

(一) が訓点を物理的に認めるか否かであるのに対して、(二)はそれから如何にして言語を再構するかという方法に関わる問題である。複数の加点であれば必ずから事情が異なるのでここでは対象としないが、まったくその可能性を否定できるものではない。そこで、ここでは「表啓」を中心に用例を示すこととし、複数の加点が見られる「法華経」は参考にとどめることとする。これに属する用例は少ないことが期待されるが、その実態は以下の通りである(文脈を示すため用いた積文は、「表啓」が山田氏のもの、「法華経」が中田博士のものである)。

(1) 雲官紀軒―皇―之壤〔表啓31行〕

壤クニと〔a c d〕  
と(子)ク(む) 壤クニに〔b e〕

(2) 梯赤―坂―而承朔〔表啓38行〕

梯いだしをたて〔a d〕  
 梯いだしを(して)〔b〕  
 梯いだしをし〔c〕

訓点資料の訓読文について 柴田雅生

- (3) 梯はしを(し)て(e)  
以上は假皇靈に下資は 螾ミ命の (表啓42行)  
資すか(り)たレ(は) (a)  
資たも(た)れ(b)  
資たすか(り)テ(c)  
資たすか(けら)れ(て) (c)  
資たすかれ(d)
- (4) 庶ネク使山は一經に悶ウ彩ル (表啓51行)  
悶かす(a b d)  
悶ク(く)す(c e)
- (5) 雖い 勵ハ愚誠ヘ 慕ネ 異カ (表啓74行)  
勵ハマサムトいヘトモ(a b c d)  
勵ハマサムトはいヘトモ(e)
- (6) 撫な躬ク 累カ 息キ (表啓79行)  
息クを(a)  
息ハヲ(b e)  
息ハヲ(c)
- (7) 光オ命ホ 隆ト 厚精ク 守シ 震越シ (表啓88行)  
厚ハ(け)れ(は) (a b c d)  
厚ハ(シ) (e)
- (8) 六ア一ナ 交探ナ 頤局ア於生ナ一滅之場ク (表啓96行)  
局サし(a b d)  
局サし(c)

- (9) 斥サ烈カ一代之區一域セ (表啓99行)  
斥サシ(a b c d)  
斥サシ(e)
- (1) (9)は基本的に漢字の訓をどう認定するかという問題である。(1)を例にとれば、仮名「ク」と「に」「と」点を認めながらも、再構された訓がクニとトチクレと分かれている。(2)(3)(6)(7)(8)のように、認定した訓点自体に違いが見られるものも多く、先に述べた(一)と併せて総合的に考察しなければならぬが、物理的認定だけで片付けられるものではなく、それがどのように適用しうるものであるかについての見通しが必要ならば、(1)(5)(6)(9)のような例も生ずることとなる。(3)に関しては山田氏が注記で問題点を整理されており、75行の「資」字の訓点との統一を重視して、他に類例のない訓「タスカレ」を支持された。(6)についても山田氏は「息」字の第二の仮名を、同じ行の「矜」字に対する「ヲ」字と同じと見なし、音読ソクの尾母音クの延音とされた。このような統一の説明は具体的な実証として尊重されなければならぬが、それでも(6)の「(は)ク(い)キヲ」のような解釈が見られるのは、とりもなおさず「表啓」の訓点はその訓への適用に関して絶対的な基準が見いだせないからだと思われる。しかし、絶対的とはいえないまでも、何らかの基準を想定し、それにより解釈の幅を狭めることはできないのであるうか。
- (10) 謹奉表詣 闕陳謝以聞 (表啓108行)  
奉タ (り) (a)  
奉タ (り) (b)  
奉タ (り) (c d)

奉<sup>(たてマ)</sup> (り)て [e]

(10)は「て」点の適用を字訓の一部とするか、助詞とするかである。「て」点を認定しないaと二つ認定するbでは問題とならないが、山田氏の注記にあるように「タテマツリテ」「タテマツリテ」両様の可能性がある。いずれにしても同じ訓みであるので、どちらにしても構わないところではあるが、先の(1)と(9)の例を顧みると、ある程度の指針の存在を想定することも必要ではないかと思われる。

次の二例は音読に関わる例である。

(11)張一騫望而非博 (表啓48行)

望(み)シも [a b c d]

望シ [e]

(12)震一睽沖一邈 (表啓79行)

沖一邈なり [a b c d]

沖一邈 (とはる) カな (り) [e]

「表啓」においては字音を示す例が少なくない。これは漢字音とみるか、文選よみとするかであるが、「邈」字の字音バクからすればeの文選よみと解する方が妥当となる。しかし、その場合には補読を多くしなければならぬ。また、「表啓」には「夸」(47行)「涓」(28行)などのように字音に関する問題があり、字音相当のものとして「カク」をまったく否定出来るものとも思われぬ。

(13)蠢一々迷一生方超塵累而已 (表啓84行)

超ユルのみなれヤ [a b c d]

超ユルのみにな (らむ) ヤ [a]

超ユルのみに (あ) れヤ [b d]

超ユルのみに [c]

超<sup>(ユ)</sup> (ゆるのみ) なら (む) ヤ [c]

超ユルのみに (誤点歟) な (らむ) ヤ [e]

(14)慨一然懷一憤誓以弘宣 (表啓18行)

宣(す) ることを弘メ [a b]

弘宣とヒロメす [c]

弘メ宣(る) ことをす [e]

※「弘」字に「ヒロメ」の仮名、「宣」字に「こと」「を」点

(15)然則驚嶺微一言假神一筆而弘遠 (表啓83行)

弘フルこと遠シ [a b d]

弘フルこと遠 (き) こと (をい) たシ [c e]

※「弘」字に「の」点「こと」点と「フル」の仮名、「遠」字に「こと」点

(13)は複数のよみを示すものと考えられ、それをどのように解するかが問題である。少なくとも二種類の訓は認められており、第二訓の解釈に違いが認められる。また、「而」字には「の」点に加えられているが、「のみ」点との重複と思われるものである。このほかにも、「表啓」には重複と解される点が見られ、山田氏は「特に珍とするにたりず」とされている。しかし、明らかに重複と見ることが出来る部分はまだしも、(15)のように重複と見なさない例もまた見られるのである。さらには、(14)は「弘宣」の二字の横に付された訓をどのように適用するかの違いも認められる。「沢漏」(35行)のように上下の漢字の訓を取り違えたと思われる例もあり、慎重に解釈されなければならない部分である。

このほか、補読とも関わるものとして、次の二例が存する。

(16)至理无言詮其道者聖帝 (表啓9行)



認定を保留したものもあり微妙な例ではあるが、「へ」点の取り扱いに関して相違が見られる。けれども、訓読文の違いは先に見たヲコト点の認定によるものがほとんどであり、大坪博士が言われる如くヲコト点と仮名の適用基準はほぼ一定したものと見ることが出来る。何ゆえにこのように二資料間で異なる様相を呈するのかは、改めて次節で触れてみたいと思う。

言无(け)れトモ〔a c〕

无(くあれ)トモ〔b〕

无(く)トモ〔d〕

(17) 経途万里估 天威如尺一步 (表啓101行)

万里なれと〔a〕

万里なれと(も)〔b c d〕

万里なれ(とも)〔e〕

以上、見てきたように「表啓」に関しては、さまざまな訓点適用上の問題が見受けられるのであるが、一方「法華経」に関しては、大坪博士が

先づ、漢字に対し直接ヲコト点を付して基本的な読み方を示し、ヲコト点のない音や正確を期するものは、更に仮名や実字を用ゐて訓を施す。

とすでに卓見を述べられており、訓点の認定に関連するものがいくつも見いだせるのみである。

(18) 不自見其過於或有 缺漏 (151行)

見(たま)へ不して〔b〕

見(あ)り不して〔c〕

見□不して〔a〕

- (三) 補読に関するもの
- (二) で述べてきた訓点の適用上の問題の一部は、その部分がどの程度補読しうるかにも関わっていた。いわゆる補読については、築島博士が「漢文訓読の総合的知見」が必要であると既に指摘されているが、それでも訓読文においてはそのまま違いが認められる。「表啓」においては一四〇箇所ほどが認められ、単純に「総合的知見」だけの問題とも思われない。以下、項目を整理して挙げてみたいと思う。
- i 字訓の違いにつながるもの
- (19) 玄奘誠 惶誠恐 (表啓72行)
- 惶(ち)〔e〕
- (20) 祇奉 綸一言 (表啓72行)
- 祇(め)て〔a〕
- 祇(み)て〔b〕・祇(み)て〔c e〕
- (21) 盡行諸佛 无量 道法 (法華経5行)
- 行じたまふことを盡(して)〔a c〕
- 行じたまふこと盡(きて)〔b〕
- ii 補読する助動詞・補助動詞の違い
- (22) 井浪開 華 (表啓36行)
- 華に〔a d〕
- 華〔b〕
- 華(のごとく)ニ〔c〕
- (23) 謝納 袈裟剃刀表一首 (表啓87行)
- 謝(する)〔a b〕

謝(したてまつりし)〔c〕

24 多<sup>ク</sup>從<sup>テ</sup>剪<sup>リ</sup>一<sup>ニ</sup>弃<sup>ル</sup> (表啓49行)

從<sup>テ</sup>かへ〔a b d〕

從<sup>テ</sup>かへ(り)〔c〕

25 知<sup>ル</sup>法<sup>ハ</sup>常<sup>ニ</sup>无<sup>ク</sup>性<sup>ナリト</sup> (法華經228行)

知(りたまは)む〔a〕

知(しめさ)む〔b〕

知<sup>シ</sup>シ(めさ)む〔c〕

※「知」字の傍に「メシ」とあり

iii 助詞・形式体言の違い

26 玄<sup>ニ</sup>一<sup>ニ</sup>契<sup>シテ</sup>行<sup>ハ</sup>業<sup>ヲ</sup>无<sup>ク</sup>紀<sup>ス</sup> (表啓16行)

玄契、〔a b〕

玄契(い)〔c〕

27 無<sup>ク</sup>述<sup>ス</sup> 土<sup>ニ</sup>一<sup>ニ</sup>風<sup>ニ</sup> (表啓47行)

土風も〔a d〕

土風(を)も〔b e〕

土風(を)〔c〕

28 在<sup>ル</sup>物<sup>ニ</sup>猶<sup>モ</sup>迷<sup>フ</sup> 况<sup>ハ</sup>仏<sup>ノ</sup>教<sup>ヲ</sup>幽<sup>ク</sup>微<sup>ニ</sup> 豈<sup>ニ</sup>能<sup>ク</sup>仰<sup>グ</sup>測<sup>ス</sup> (表啓68行)

在する(すら)〔a b d〕

在する(ときには)〔c〕

29 世<sup>ノ</sup>尊<sup>ニ</sup>何<sup>ノ</sup>因<sup>ニ</sup>何<sup>ノ</sup>縁<sup>ニ</sup> (法華經51、52行)

何の因・何(の)縁をもちてそ〔a〕

何の因(と)、何(の)縁(と)をもちてそ〔b c〕

このほか、字音に関するものとして「瀛・瀛」(表啓8行)など、音便等の同一訓の形態上の違いとして「範(り)たり・範(り)たり」(表

啓34行)などがあり、不読の可能性がある助字の扱いにも違いが認められる。しかし、訓読に関して問題となるのはほぼ右の三類に集約できるものと考えられる。このうち、iは文脈の把握と漢字と訓の対応関係によるものであり、後者については同じ文脈把握であっても見解が分かれるところであろうと思われる。iiについては文脈把握が第一であろうが、23のように補助動詞を補う場合には訓読自体の考え方が反映しているようにも思われる。iiiの20句についても同様に解することができよう。どのような訓読を想定するのか、具体的には文脈的内容をできるだけ言語形式として表そうとする方向と、訓点から窺える最低限度のものに留める方向とに分かれるように思われる。どちらが優れているとは一概に言えるものではないし、そもそも訓点資料から一つの訓読方法しか帰納しえないと断ずることに、考慮の余地があるようにも思われる。この問題は、亀井孝「古事記はよめるか」<sup>註五</sup>や船城俊太郎「変体漢文はよめるか」<sup>註六</sup>などとも繋がるものと考えられ、いわば「訓点資料はよめるか」という問いにも発展する。特に後者は真福寺本・楊守敬本『将門記』における漢字と訓との対応関係が多少とも流動することから、変体漢文が厳密に一定の訓を強制するものではないことを述べられている。確かに変体漢文は「それらしく訓読されていけば」よしとされるものであったらうと思われる。けれども、そのような文章に加点されている事情をどのように捉えるかについてはまだまだ検討の余地が残されているのではないかと考える。訓点資料であれば、学問的態度から一定の訓を要求することが十分想定出来るであろうし、当時の訓読のすがたを厳密に復元することを訓点資料研究の最終目標の一つとして掲げることも可能であろう。けれども、そのような復元はどのようにして可能であるのか。具体的な見通しを

持たなければ単なる努力目標に過ぎないとも言え、今後の研究の進展を待つより他はないと思われる。

以上、訓読文の違いをもたらすものとして三点について見てきたが、(一) (二) (三) は関連しつつも少しずつ性質を異にしている。(一) 訓点の認定はまずは物理的な視認が基盤としてあるのに対し、(二) 補読はそこに無いものを補うという、解読主体に依存する部分が大きいものである。三点には属さないが、

伏乞てつ雲フ雨マ曲マ垂て天て文を府照シテラシ (表啓81〜82行)

について認められる、字序のままによむか、或いは「雲雨」から「乞」へ、「天文」から「垂」へと返ってよむか、という違いも(三)に類するものと捉えることができよう。したがって、解読にあたっての問題点もこの三つの段階で整理することが可能であろうと思われる。もちろん(一) 訓点の認定も解読者による違いが認められるのであり、機械的に処理しうるものでもない。けれども、(二) 補読で見たような訓読文自体についての解読者の考えが(一) について入り込む可能性は低く、一線を画す必要がある。むしろ、問題となるのが(二) 訓点の適用ではないかと思われる。そして、この点についての調査がいまだ十分と言えないのではないかと考える。平安後期の訓点資料については、おそらく適用の基準があると言いうるのであるが、本稿で扱ったような平安初期の訓点資料においては、適用方法に明確な基準がないと言えるのか、それを見極めることが必要ではないかと思うのである。次節では、適用基準に関することからについて、「表啓」を例にいくつかの私見を述べてみたい。

#### 四 『大唐三藏玄奘法師表啓』の加點

「表啓」は一〇九行のごく短い資料ではある(延べ漢字数二一七三字、異なり漢字数八八九字)。しかし、加點は稠密であって、それゆえに平安初期の資料として重要視されてきた。その加點を見るに、複数の箇所の一の漢字に同じような加點が見られることに気づく。

○冒

冒フカセリサカシ 險シ (74行)

冒フカシ 犯フカシテ 威を 嚴を (78行)

懼オソ 空疎ハ 於冒フカセリ 思シ (92行)

○泛

泛フカシテ 蒼津ニ (38行)

而泛フカシ 提ウカシ 河ニ (44行)

泛ウカヘテ 寶舟を (65行)

資料の量的乏しさゆえに、これら同一資料内に見える用例を過大に評価することには慎重でなければならぬ。しかし、重要であるのは、これらの例が物語るものが偶然の一致であるか否かを判別することと思われる。そのためには、「表啓」の資料内の徹底的な吟味が求められるであろう。以下では、字訓に関わるもので同一字に加えられた複数の加點例を、整理して挙げてみることにする。なお、「一」は訓の前半部分が見られないことを示す。

A 全訓が付されているもの

A 1 複数例に同じ加點が見られるもの

「假」ヨリ (4183) 「塵」ケカシ (5293) 「守」一リ (7288) 「縁」

ヨル (59 81) 「霑」ウルホセリ (36 88) 「圖」はかりコとを (11) ハカリことを (79) 「戰」オソリ (29 52) カシコマリ (85) 「觸」ケカシて (62) ケカシて (85) 「資」たすかれ (42) たす (けら) レて / たすかして (75)

A 2 活用を示すもの

「乗」のり (33) のラ (101) 「冒」ヲカセリ (74) ヲカセリ (し) こと (92) ヲカシ (78) 「弘」ヒロメ (18) ヒロメム (27) のフルこと (83) ーク (83) 「宣」のフル (14) のヒ (83) 「憑」たのみ (18) たノみて (73) 「撫」なてて (8) なて (79) 「昧」クラシ (50) クラきに (81) 「泛」ウカヒて (38) ウカヒ (44) ウカへて (65) 「越」トラケたり (72) トラケヌ (89) 「窮」きハメ (74) きハメツ (102) 「蕩」トラカセリ (10) トラカシ (66) 「覽」みたり (19) みよと (69) 「超」コユルのみなれヤ (84) コエて (105) 「闡」ヒラク (35) ヒラきて (66) ヒ (ら) カ (れ) て (4) 「輶」ツ、マシメ (む) (52) ツ、マシメ (む) ヤ (81)

A 3 派生語の関係にあるもの

「詳」明に (48) 明ケク (56) 「響」ヒ、かす (37) ヒ、きを (80) 「慙」ハチ (17 92) はチ (28) 「照」てリ (26) てラセリ (38) てラシ (82) 「載」則チ (11) 則 (22) のせて (103) 「紀」ツイて (17) ツキ (89)

B 部分的な訓が付されているもの

B 1 加点されている部分と同じもの

「掩」オ (ほ) ヒて (9 77) オ (ほ) ヘリ (99) 「微」クハシ (き) コとの (5) クハシ (き) をは (68) クワシ (くし) て

(97) の (と) レリ (33) すコシ (48) 「謬」ア (や) マテ (17 73) ア (や) マテ (88 104)

B 2 活用語尾を示すもの

「多」ーク (49) ーシ (105) 「大」ーなる (14) ーなることを (28) 「遠」ーク (56 97) ーシ (83) 「無」ーし (47) ーク (61) ーして (52 84 89) 「空」ーク (17 45 73) ーシ (く) (47)

C 加点された内容が部分的に重なるもの

「標」ヘウして (51) ヘ (う) して (65) 「彩」ウルワシ (き) こと (51) ウ (る) はしき こと (90) 「庶」ネ (かは) クは (51) ークは (61) 「慕」ネカヒを (56) ネ (か) フこと (74) 「成」なシ (25) ーセリ (28 57) ーセリとも (75) 「搜」アナクリて (66) ア (な) クリ (102) 「時」ツきを (22) ーき (43) 「曲」マケ (て) (59) マ (けて) (82) 「有」ーリ (3 73) アラす (75) 「研」みかき (22) (み) かきに (102) 「祗」ツ、シメて (21) ツ、シ (て) (72、用例 20 を参照) 「盡」ツクセ (り) と (48) ーす (102) 「聞」きク (3 79) ききて (55) きケルか (107) き (け) ル (69) 「符」かなヘリ (41) かなへ (む) (51) かな (ふ) (92) 「精」クハシキ (72) クハシ (き) (88) 「若」シカシ (5) ーシ (29) 「至」いたレルに (62) いたリた (る) (7) い (た) リたるも (48) 「親」ーたり (58 107) ーリ (60) 「識」サトリ (27) サ (と) リ (103) 「降」クタシ (58) クたして (91) ーして (98) 「陳」のヒて (3) のフ (る) こと (47) 「預」アツカレリ (89) アツ (か) リて (55) 「飛」ーはし (77) ーシ (9 33)

D 加点された内容に重ならない部分があるもの

「分」―チ (9) ワカテ (り) (80) 「奉」ウケ (57) た (てま)  
ツル (71) た (て) マ (つり) て (108) ールに (87) 「如」こと  
し (101) こと (し) (25 107) ーし (49 58 101) 「恃」た (の) みて  
(18) (た) のみて (74) 「无」な (く) トも (7) ーき (73) 「深」  
フカ (く) ス (52) ーク (104) ーす (85 93) 「獨」ヒ (と) リ  
(84) ーとり (9) 「荷」になヒ (84) (に) なへリ (17) (に) な  
ヒて (105) ーフ (108) 「詣」マツルことの (101) ーてて (26 52 108)  
「輕」かる (かる) シク (52) ーき (85) 「遐」ハ (る) かなること  
を (74) ト (ほ) ク (97) ーに (42) 「開」ヒラ (き) たり (36)  
ーケリ (59) 「非」アラ (す) (69) ーすき (48) ーすハ (77) ー  
すは (78) ーす (あ) レは (27)

E 別訓を示すもの

「下」クたして (44) シた (に) して (61) 「在」ーリ (18) ー  
する (68) 「尋」たツネ (18) ーメ (45) ーチ (103) 「屬」ツケ  
(13) ア (つ) ケ (73) 「希」ネカフ (78) ーかに (55) 「往」ユ  
きて (18) サ (きに) (100) 「截」すてて (50) ト、ノホレルこと  
(73) 「斯」シカシナ (か) ラ (4) ーれを (16) ーの (59 81)  
「服」コル (も) (90) キル (91) 「測」はらラムヤ (69) た (つ  
ね) (97) 「齊」すクヘリ (34) ヒトシクシ (61)

E の位置付けに関しては他資料に頼らなければならないが、A、D を比較するに、先に見たように基本的に同じ加点になる傾向が見て取れるように思う。特に B1 が見られることは、「表啓」において必ず

しも加点が必ずしも恣意的なものではない可能性を窺わせるものと考えられる。この他にも、「伏て・並に・亦た・以て・其の・咸ク・尚し・已に・幸に・徒に・忽に・惣て・所口・故に・敢て・既に・未た・爰に・為す・猶し・當に・竊に・言す・誠に・豈に・遂に」(仮名は訓点を示す) などの諸字についても、ほぼ一定の訓点に加えられる傾向がある。

問題は C、D であるが、それでも C の用例の方が多い。また、C の中には共通する部分が語頭部分であるものが多い。このことから、加点に語頭もしくは語尾に当たる部分を施す傾向を見ることができよう。

これは、「法華経」において大坪博士が早くヨコト点と仮名の関係を指摘されたように、言わずもがなのことであるかもしれない。しかし、諸氏の訓読文を異にする「表啓」においても同様の傾向を見ることができるのであり、あるいは訓点資料全般に言いうることと想定することもあながち無謀なことではないと考える。もちろん、個々の資料においてまた別の様相を見せるものでもあり、まずはそれぞれの検証が必要であると考える。ちょうど「表啓」において山田氏が文字を綿密に吟味されたように、加点方法についても逐一の検討を加え、その傾向性を吟味する必要があるのではないかと思うのである。<sup>注八</sup>

さらには、A1 の「圖」「觸」の二字に見られるようなヨコト点と仮名の関係についても考慮が必要かと思われる。平安初期の訓点資料には、ヨコト点と仮名との交渉がまま見られることは大坪博士の著書<sup>注九</sup>に詳しい。大坪博士は、その中で、ヨコト点に番号を付した資料として『大乘広百論釈論』承和点などを示された上で、

繰り返していふならば、ヨコト点は発生期における略体仮名の不備を補ふために案出され、主として、漢文訓読の際に常に補読される

助詞・助動詞・特殊な体言・用言・敬讓語等を示す記号として利用された。ヨコト点は、「言語を写す記号」として見ると、本質的な欠陥を持ち、表記能力に限界があつたから、未知の文字の音訓を示し、特殊な語句の解釈を記すためには、やはり略体仮名が用ゐられねばならなかつた。かくして、両者はそれぞれの特徴を活かしつつ相ひ協力して、共通の目的たる加点の実用に役立つために発達していった。

と結論づけられた。訓点が成立した背景には、もちろんん学説の伝承という学問上の意味も大きく関わっている<sup>注〇</sup>。訓読を示す実用性だけで説明しえない部分も多々あると言わねばならない。けれども、両者に配慮し、より正確な訓読の姿の復元を目指す立場からも、訓点についての詳細な調査が必要ではないかと考える。

## 五 まとめ

以上、縷縷述べ来たつたことは、訓点資料における加点方法の綿密な吟味の必要性ということになる。言わば、当たり前のことを、失礼も顧みず、諸氏の訓読文を引用しながら示したに過ぎない。しかし、「表啓」のような資料においても、それなりの加点方法の傾向が見られることは十分注意してよいことではないかと思われる。

築島裕博士は近著『平安時代訓点本論考 研究篇』<sup>注二</sup>において、中田祝夫博士が打ち立てられたヨコト点を中心とした訓点資料の体系をさらに進展させ、学問としての系統と個々の経蔵における訓点資料の伝存状況にも注意を向ける必要を説かれた。改めて訓点資料とは何かを考える必要性を感じると同時に、かつて山田忠雄氏が「おそらく将来もつと科学的に展開せられねばならぬものであらう」とされた方法の

実践が、より強く求められているように思われる。大方の批正を仰ぎつつ、具体的な資料の調査を急ぎたいと思う。

## 付記

島田良二先生は、本学赴任後日が浅い筆者のような者に対して、気軽に声をかけて下さり、なかなか慣れない筆者を暖かく見守って下さいました。専門は多少異なりますが、学識の深さと広さを身近に感ずることが出来たことは大きな喜びでした。ただ、いろいろとお教えいただきましたことがまだ山のようにあり、このたびのご退任が残念でなりません。あらためて学恩に感謝申し上げるとともに、先生のご健勝を心よりお祈り申し上げます。

## 注

- 一 築島裕「訓点語研究の足跡を辿って」および、石塚晴通「訓点語研究 今後の課題」。ともに『訓点語と訓点資料』第九三輯（一九九四年三月）に収録。築島論文は後に『平安時代訓点本論考 研究篇』（汲古書院、一九九六年五月）に構成と内容を一部変えて収録されている。
- 二 注一の築島論文。
- 三 築島裕『興福寺本大慈恩寺三藏法師伝古点の国語学的研究 研究篇』（東大出版会、一九六七年三月）。
- 四 峰岸明「高山寺蔵史記点本の加点態度について」（『高山寺古訓点資料第一』所収、一九八〇年二月、後に『平安時代古記録の国語学的研究』（東大出版会、一九八六年二月）に収録）。また、小林芳規博士「石山寺蔵仏説太子須陀摩羅經平安中期点の訓読語について」（『訓点語と訓点資料』第七一・七二輯合併号、一九八四年五月）などにおいても、漢字と付訓との対応関係についての言及がある。
- 五 越智裕二「『神田本白氏文集』における「て」のヨコト点についての一考察」（『国語学会平成八年度春季大会発表要旨』、『国語学』第一八六輯）「訓点資料における「区切り」「返読」を示す星点をめぐって——組織化の試み——」（『国語学会中国四国支部第四十二回大会研究発表要旨』、『国語学』第一八八輯）。
- 六 このほか、小林芳規博士「平安鎌倉時代に於ける漢籍訓読の国語史的研究」（東大出版会、

- 一九六七年三月)にたびたび引用されている部分を参考とした。なお、中田博士による「古訓点閑談(その一)——知恩院蔵本三蔵法師表啓の古訓点稿」(『漢文教室』第三〇号、一九五七年五月)は、その後著書に収録されたものとして、特に挙げなかった。
- 七 訓読文といっても、文章化したもの(代表的なものとして、春日政治博士著『西大寺本金光明最勝王経古点の国語学的研究』)と、訓点を解説した結果を仮名等によって原漢文に書き込んだものがある。後者は、吉沢義則博士が「表啓」等で示されたスタイルであり、すべての訓読を示さない場合があるが、部分的にであれ解説結果を示している部分を対象として比較した。ヲコト点を示しただけのものは基本的に対象としていない。
- 八 注一の築島論文参照。漢書楊雄伝天曆二年点は四種類の訓読文が発表されているが、未見のものがあるため今回の検討から外した。
- 九 山田忠雄「認識論文字論——和泉往来のばあひ」(『国語史への道 上』三省堂、一九八一年六月)参照。
- 十 訓点はただでさえ細かな表記を必要とするから、場合によっては活字化にあたっての誤植等も存するかもしれない。けれども、それらを判別するには、原文によって確認するよりほかない。そのため、今回の挙例では多少の違いを対象としない部分がある。
- 一一 大坪博士のヲコト点図および仮名自体表は「山田本妙法蓮華経古点」(大坪併治著作集2『改訂 訓点語の研究 下』(風間書房、一九九三年二月)所収)による。
- 一二 注一一に同じ。
- 一三 『国語学大辞典』(東京堂、一九八〇年五月)「訓点資料」の項。
- 一四 注一の築島論文。
- 一五 「古事記はよめるか——散文の部分における字訓およびはゆる訓読の問題——」(『古事記大成 言語文字篇』、一九五七年二月、のちに亀井孝論文集4『日本語のすがたとこころ(二)』に収録)
- 一六 「変体漢文はよめるか——『将門記』による検討——」(『小松英雄博士退官記念 日本語学論集』所収、三省堂、一九九三年七月)
- 一七 築島博士は注一論文において、「この面(解説者の主観の介入——引用者注)から見れば、訓点資料の中でも、平安時代後期の朱点本・墨点本等は、比較的正確に解説し得るものが多く、解説文への信頼度も高い。」と述べられている。
- 一八 訓点を峻別しての論述としては、部分的にはあるが、稲垣瑞穂「東大寺図書館蔵本百法頭幽抄の古点について」(『訓点語と訓点資料』第七輯、一九五六年八月)などがある。しかし、管見ではさほど多くはないと思われる。
- 一九 大坪併治博士 仮名とヲコト点との交渉(『改訂 訓点語の研究 上』、一九九二年一月、風間書房)
- 二〇 松本光隆「漢書楊雄伝天曆二年点における訓読の方法」(『国語学』第二二八輯、一九八二年三月)、小助川貞次「上野本漢書楊雄伝訓点の性格——中国側註釈書との関係——」(『訓点語と訓点資料』第七輯、一九八七年三月)などを参照。
- 二一 『平安時代訓点本論考 研究篇』(汲古書院、一九九六年五月)
- 二二 「知恩院蔵本大唐三蔵玄奘法師表啓古点の研究」(『国語学』第二九輯、一九五七年六月)